

富士見平テント泊:瑞牆山・金峰山山行報告

奥秩父の名峰・瑞牆山と金峰山は深田久弥の百名山であり、20 年ほど前に経験済みであるが、この数年、富士見平テント泊で再訪してみたいと考えていた。11 月初旬、同年代のちば山メンバー3 名に快く参加していただき、**紅葉と霧氷の素晴らしいハイキング**を堪能できました。瑞牆山を清野さん、金峰山を寺崎さんに報告していただきました。(菊池)

【山行日】2016 年11月 2 日(水)、3日(木)

【山城】奥秩父

【ルート】富士見平～瑞牆山・金峰山

【登山方法】テント泊ハイキング

【参加者】CL 菊池、井上(食担)、寺崎(3 日報告)、清野(2 日報告)、



霧氷の金峰山

11 月 2 日 瑞牆山 天候:晴れのち曇り

【コースタイム】

8:50 瑞牆山駐車場到着→9:20 登山口→10:35 富士見平(テント設営)11:05→ 11:35 天鳥川→
13:20 瑞牆山山頂 13:35→14:55 天鳥川 15:05→ 15:35 富士見平

車で増富温泉街を通り抜けたあたりから、溪流沿いの狭い林道となった。周りの木々は紅葉し、朝日を浴びて輝いていた。黄、赤、緑とその強烈な色のコントラストに圧倒された。瑞牆山荘近くの大駐車場に車をとめた。今回はテント泊で自炊なので荷物が多い。登山口は瑞牆山荘前にあった。

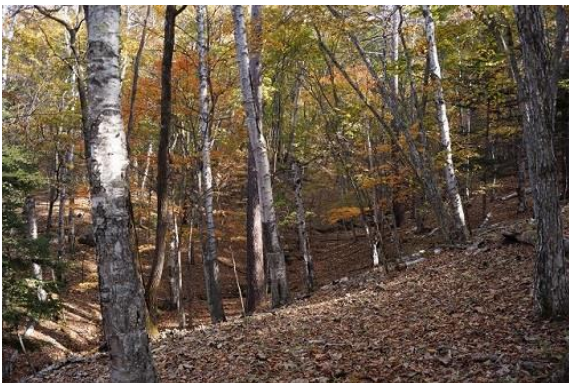


瑞牆山荘駐車場



ミズナラ林をゆっくり進む

シラカバとミズナラの林の中を落ち葉を踏みしめながら、ゆっくりと登りはじめた。しばらくして林道を横切り、里宮坂の急登となった。重い荷物を背負いながら喘ぎ喘ぎ登っていった。登山口から30分ぐらいたったころ、突然、黄葉したカラマツ林の向こうに、瑞牆山の奇峰が聳え立って見えた。急登はその先もしばらく続いた。



白樺も混じる素晴らしい広葉樹林



カラマツ林の向こうに瑞牆山

次第に傾斜が緩やかになってきたころ、富士見平に着いた。今夜の宿泊地である。女性用と男性用の2つのテントを設営し、不要な荷物は置いて、30分後に出発した。



富士見山荘直前の素晴らしい紅葉の広葉樹林



富士見小屋



テント二張

緩やかな傾斜を登って行くと、小川山へのコースが分かれた。その先は急坂を下っていった。天鳥川を渡ると、巨岩に割れ目の入った、桃太郎岩があらわれた。

その先は紅葉した深い樹林帯の中をジグザグな急登が続いた。ゴロゴロした大きな岩の重なりを進み、シャクナゲが密生する中を過ぎると、急に周囲が明るくなり、左に大ヤスリ岩が仰ぎ見られた。

この岩の右下を通り過ぎると、黒森コースと合わせた小さ岩の狭間にたどり着いた。

北側へ回り込むようにして鎖や鉄梯子の付いた岩場を急登すると山頂に着いた。ガスっていて展望は全く得られず、しかも寒かった。記念写真を撮り、休憩もそこそこ下山することにした。



桃太郎岩



展望のない瑞牆山山頂

2時間程でテントのある富士見平に着いた。外のベンチのあるテーブルで、夕食の準備を始めた。Iさん特製のサーモンサラダで乾杯したが、寒いので、早々にテントの中へ移動した。温かいほうとうを食べながら、暖かいテントの中で、夕食とアルコールとおしゃべりを楽しんだ。19時過ぎにお開きとなり、就寝した。暖かい格好で寝たつもりでも、深夜寒さが底から伝わってきて、腰が冷えてしまった。次回テント泊するときは、腰回りを暖かくして寝ようと思った。(清野 記)



11月3日 金峰山 晴れ

・5:00: 起床 テントの中からフライが凍り付いているのがわかる。テントの端の方がぐっしょり濡れていて、内外の気温差を改めて感じる。テントが初めてという清野さん、寒くてよく眠れなかったようだ。 まだ、完全に目が覚め切らない間に、昨夜の料理の続きに餅が入って、井上さんの朝食の準備がどんどん進む。その手際よさにはいつも脱帽。体が芯まで温まる。リーダー持参のコーヒーを飲んで、出発の準備。

「寒いから着る物をよく考えること、手袋はすぐに出せるようにしておくこと。」等々、リーダーの注意を聴いて出発準備に取り掛かる。「いらない荷物はテントに置いていくので、ザックの中をできるだけ軽くしておくように。防寒対策は十分に。6時半には出たいなあ、でも7時かなあ。」の

んびり準備をする我々に、リーダーの読みは的中。

・7:00：出発

富士見平小屋の右手から緩い傾斜を登り始める。ほどなくどこを登ってもいいような広い緩斜面に出た。1時間ほどして「富士見平⇄大日小屋」の立て札の前を通り過ぎ、どんどん森の中に入っていく。ちょっと南アルプスの中を歩いているような感じがした。ほどなく青い屋根の大日小屋が下方に見えた。避難小屋なのだそう。いくつか割れた「大日岩」という大きな一枚岩も現れた。しばらく登ると向こうに雪に覆われた南アルプスがくっきりと見える。寒いからこそのご褒美だ。

2時間ほど歩くと別世界が広がっていた。朝日に照らされる霧氷だ。氷から透けて見える枝々の美しさ！みんなの歓声が上がる。樹々から落ちてくる小さな霜は光に照らされ、拡大したダイヤモンドダストを見ているようだった。リーダーに急かされるまで、その自然の造形に、暫し目を奪われた。地面は羽毛のような霜に覆われ、まるで枕投げをした後のよう。ブーツの下からはガラスと金属の破片を混ぜた上を歩いているような乾いた音が微かにした。

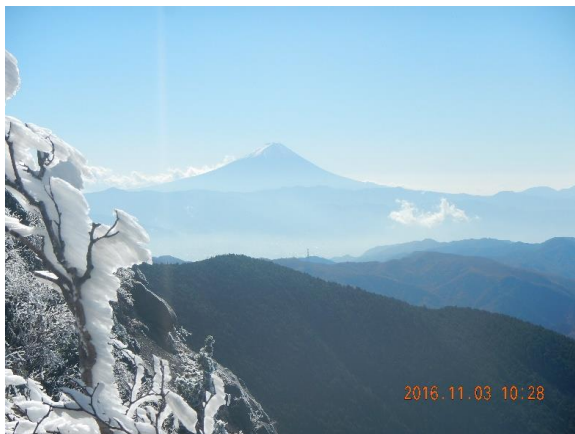


霧氷の芸術

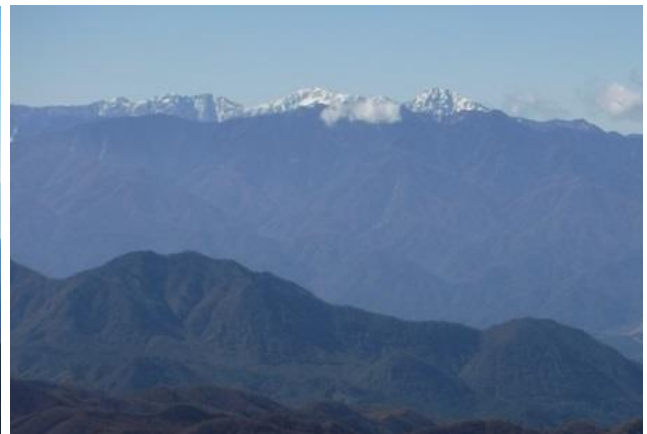


散り落ちる霧氷

周りの美しさに目を奪われながら3時間ほども進むと、樹氷の向こうに富士がくっきりと姿を現した。手前の樹氷、その後ろの赤茶けた山脈、そのまた後ろの青い山々のコントラストの向こうに浮かぶ富士の姿がなんとも言えない。



霧氷と富士山



雪を頂いた白鳳三山



霧氷と瑞牆山のグッドショット



余裕の記念撮影



岩尾根を進む

3時間半ほど上り詰めると向こうには霜に覆われ尖った金峰山の頂上が人を寄せつけないような存在感で現れた。もう岩山である。リーダーの注意を気にしながら、ごつごつした岩場を進んでいく。

本当にあそこに登るのか、本当に登れるのか。ずうっと前方の登山者のヤッケがちらちらと見えなければ、心配になるほど、その岩山は荒々しかった。ほどなく岩場。「岩が凍っているので注意深く！」と何どもリーダーが声をかける。



大迫力の霧氷の岩壁



霧氷林の滑りやすい岩を慎重に



大迫力アングルの五丈岩



寒い山頂で記念撮影

12時少し前、やっとも思いで登頂。寒い、とにかく寒い。風もある。早々にトップから降りて、立ち並ぶ岩陰で行動食を口に入れるが、何を食べているのか感じなくなるほど、寒い。その中でも悠然と井上さんは食している。

・12時過ぎ、早々に引き返す。テン場に着いたのは3時過ぎ。大急ぎで朝の残りを温めて食べる。井上さんのガスコンロ持参がとても役に立つ。残った物を近くの初老男性集団にあげながら、井上

さんはゆったりと後片付け。



リーダーは「暗くなる下山は危ないから…」と我々を急がせるが、無事に戻ってきた安心感と疲れでつい、ゆっくりになってしまう。

駐車場まではもう危険ではないので、キーを持っている寺崎が先に、リーダーと清野さんが次に、のんびり後片付けの井上さんが最後に出発。ヘッ電をつける前には駐車場に着きたいと急いだが、白く車道が見えた時にはほっとした。次々に到着したが、もうどっぷりと夕闇が取り囲んでいた。

その後の温泉は至福の時だった。これがあるので山登りはやめられない！とつくづく思う。

食事をして千葉に着いた時はもう深夜になっていた。

下山の時は「もう、この山はまっぴらだ。」と思っていたのに、あの岩山目に浮かび、今度はもう少し、うまく登る」と思っている自分に苦笑。

リーダーのプランは毎回新しい自分に出会える。いつもながらの井上さんのガッツ、清野さんの着実な登り、印象に残る山行だった。（文責：寺崎）